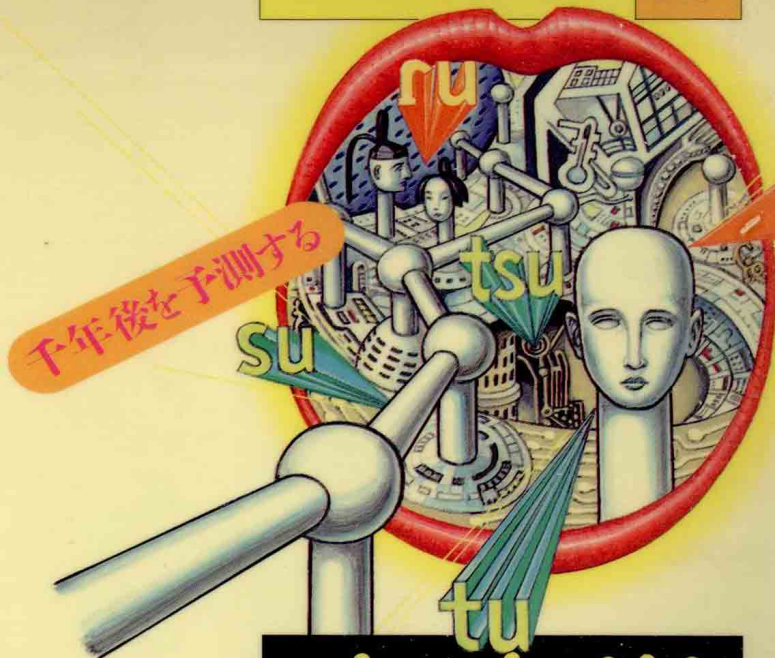


ことばの



未来学

城生佰太郎

「チ」「ツ」は「ティ」「トゥ」に、
アクセントは平板に——。

日本語の未来を例にして
言葉に内在する変化の方向性を
新歴史言語学の立場からさぐる。



1086

講談社現代新書

ことばの未来学

1992年2月20日第1刷発行

著者——城生佰太郎 ©Jōo Hakutarō 1992

発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽2丁目12-21 郵便番号112-01

電話(編集)03-5395-3521 (販売)03-5395-3626 (製作)03-5395-3615

装幀者——杉浦康平＋谷村彰彦

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

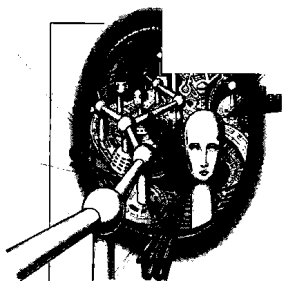
ISBN4-06-149086-9 Printed in Japan (定価はカバーに表示してあります)

落丁・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、

学芸図書第一出版部あてにお願いいたします。



ことばの 未来学

城生佰太郎

講談社現代新書

享佳へ

●目次

はしがき	8
------------	---

凡例.....	10
---------	----

第1章 ことばの進化論.....	13
------------------	----

ダーウィニズムと言語学……ことばは時代とともに変化
する……言語の分類を考える系統樹説……系統樹説の欠
を補う波紋説

第2章 歴史言語学の成果と限界.....	25
----------------------	----

ことばは規則的に変化する……同化……脱落……日本語
の脱落……機能効率……ことばの重みづけ……音韻の重
みづけ……小さい [g] と [ŋ] の弁別力……“wa” だけが

とり残されたワケ……パウルの類推変化……「然(さ)」が
「そう」に変化したワケ……「類推変化」の弱点……音韻法
則発見への道……インドへの注目……グリムの法則……印
欧比較言語学の始祖……ヴェルネルの法則……歴史言語
学の凋落……音韻法則に例外あり……言語地理学の貢献
……果石方言調査の意味すること……歴史言語学を超え
るために……サビアの駆流……サビアの再評価を

第3章 新歴史言語学……………85

科学は未来予測を可能にする……カタストロフィー理論
とトポロジー……言語学における未来予測……生物進化
論と言語理論……ラマルクの前進的発達説……生物進化
論における「指向性変化」……「労力通減の法則」……新歴
史言語学における「指向性変化」……マクロ言語学とミク
ロ言語学

第4章 日本語の未来学 ……………109

未来予測の対象としやすい部分……音節の構造……上代

語はどうだったか……鹿児島方言の変化パターン……モーラ性……閉音節から開音節への指向性……「モーラ性」をもっていない方言……文献資料による裏付け……アクセント……単純化に向かうアクセント……母音や子音は予測精度が落ちる……母音調和……母音調和は不安定である……“l”と愛……重母音を好まない日本語とフランス語……音芯論的張り母音……長母音と短母音……石油はセキユかセキューか……「イ」と「ウ」の運命……子音の体系……「チ」や「ツ」が危ない……母音が大きな顔をしている……「みかづき」から「みかずき」へ……表記も音声をゆさぶることがある……市民権を得た「シ濁」……「ピツツア」が「ピッタ」になる日……うすれる原音意識

第5章 残された問題181

行きつ戻りつ、螺旋状の発展……ケムルとケブル……残った子音……借用は仲良しの国から……「スイ」と「シ」は分化する……これからの展望……根深い「ウ濁」

参考文献	196
------------	-----

さくいん	198
------------	-----

はしがき

30年後の日本では、人手不足が深刻化して、その数は優に1000万人を超える。また、14歳以下の子供たちが減る一方で、65歳以上のお年寄りが増え続けるために、1997年には老人の方が子供を上回る、いわゆる逆転現象が起きる。さらに、高齢化社会にますます拍車がかかるため、税金や社会保険料などの負担額が増加し、実質的に市民のふところに入る「可処分所得」の伸び率は、ほとんどゼロになってしまう。

大型コンピュータによるシミュレーションを実施した結果、こんなショッキングな未来予測が、三菱総合研究所情報サービス部長、岡本勲氏によって発表されている。

いよいよ今世紀も、余すところあとわずか。まさに、秒読みの段階に入ってしまった。そんなわけで、来世紀をにらむ企画は、あらゆる分野で、文字どおり目白押しである。

御多分に漏れず、本書『ことばの未来学』の着想も、ルーツをたぐれば、1990年1月15日にNHKの総合テレビで放送されたニュース番組、「変わる日本語」制作スタッフの求めに応じて、急遽用意した内容がもとになっている。

その後、この着想は『科学朝日』第50巻8号、拙著

『言語学は科学である』（情報センター出版局、1990年11月）の第4章などで徐々にふくらみ、ようやくこの度、このような形になって産声を上げることとなった。したがって、まだまだいろいろな面での不備があることは、否めない。

しかしながら、もし本書にたった一点でも良いところがあるとすれば、それは欧米で生れた理論の上塗りではなく、正真正銘、自前の理論を公にしたということである。中身は大したことがなくても、せめて研究者の姿勢として、追従者となるよりは先駆者でありたい、という私の常日ごろの願いが達成されたことだけは、率直に言って、たとえ自己満足に終わるとしても、大きなよろこびである。

なお、第4章の一部と第5章に関しては、草稿の段階で、筆者がもっとも信頼している若き学究である、筑波大学大学院文芸・言語研究科博士課程の松崎寛氏に目をとおしていただき、数々の有益な助言を頂戴した。ここに、同氏のご好意に対し、記して深謝の意を表する次第である。

1992年1月1日

城生佰太郎

凡例

本文中に出てくる音声記号と音韻記号の一部を、日本語と英語による近似音で簡単に解説しておく。

音声記号：[] に入った記号。具体的な発音の特徴を示す。なお、IPAは国際音声記号の略号である。

[a]：ヤに含まれているア。前舌の明るい母音。

[æ]：アとエの中間音。英語 hat の母音。

[b]：バ行の子音部。

[^mb]：東北の一部で聞かれる「ンブ」という感じの、少し鼻にかかったバ行音。

[ɸ]：シャ行の子音部。[ʃ]で代用することもあるが、日本語ではこちらの方が厳密。

[d]：ダ、デ、ドなどの子音部。

[ⁿd]：東北の一部で聞かれる「ンダ」という感じの、少し鼻にかかったダ、デ、ド。

[dʒ]：ジャ行の子音部。[dʒ]で代用することもあるが、日本語ではこちらの方が厳密。

[dz]：「座敷」「混雑」のザなど、語頭や「ン」の直後に立つザ、ズ、ゼ、ゾの子音部。

[e]：エよりも幾分イに近い、前舌の半狭母音。

[ə]：英語 Japán の Ja のように、stress のない音節に現われる、あいまいな母音。

[ɛ]：エよりも幾分 [æ] に近い、前舌の半広母音。

[f]：英語 f のように、上の歯で軽く下唇の内側を噛むようにして発音する子音。

[ɸ]：フの子音部。ろうそくを吹き消すときのような音。[F]で代用することもある。

[g]：ガ行の子音部。ただし、鼻濁音は [ŋ] になる。

[h]：ハ行のハ、ヘ、ホなどの子音部。

[i]：イに近い、前舌狭母音。

[ɪ]：英語 “I” のような、二重母音の副音部。

[ɪ]：英語 bit の i のような、少しエに傾いたイ。

[ɪ]：東北の一部で聞かれる、シとスの中間のような中舌母音。[i]とも書かれる。

[j]：ヤ行の子音部。なお、IPAでは“y”を使わない。

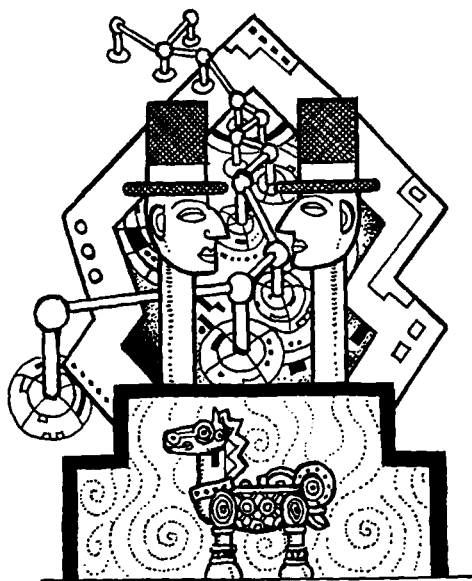
[k]：カ行の子音部。

- [l] : 英語 little における下線部を示す。1989年版 IPA から採用された、新しい記号。
- [n] : 「パン」「本」など、語末の「ン」。
- [ɔ] : 遠くの人に向かって「オーイ」と叫ぶ時のような、アに近いオ。
- [r] : ラ行の子音部を表わす特殊記号。
- [ʂ] : 専らアメリカで用いられている独自の記号。IPAでは、[ʃ]に当る。
- [θ] : 英語 three などの、th 無声音。なお、有声音は [ð] となる。
- [tɕ] : チャ行の子音部。[tʃ] で代用することもあるが、日本語ではこちらの方が厳密。
- [x] : ドイツ語 ach ラウトの子音。「へ」の子音部が、少しだけ似ている。
- [ɣ] : [x] よりも、もっと奥寄りの摩擦子音。
- [ʒ] : 英語 pleasure などの下線部。有聲摩擦子音。
- [ʐ] : 「筋」など、非語頭の摩擦音ジ・ジャなどを表わす精密表記。ただし、人によっては弱破擦音 [ʑ] で発音する。
- [ː] : アに対するアーのような、長音化を示す補助記号。
- [ˑ] : アーほどは長くならない、半長を示す補助記号。音符における ˑ と ː の関係に相当する。
- [t[◌]] : 「行った」のツメ音「ッ」の、先行要素を示す。なお、「一緒」の「ッ」なら [t[◌]] となる。
- [t'] : 「行った」のツメ音「ッ」の、後続要素を示す。なお、「一緒」の「ッ」なら [t'] となる。
- [ʷ] : ウのような非円唇母音を表わす。なお、欧米の u は唇を円めた [u] である。
- [ʔ] : 咳をするときのような、激しい破裂子音。声門破裂音という。

音韻記号：/ / に入った記号。抽象的な音の体系を示す。

- / ä / : 上代特殊仮名遣いにおける「乙類」のア。
- / ë / : 上代特殊仮名遣いにおける「乙類」のエ。
- / ö / : 上代特殊仮名遣いにおける「乙類」のオ。
- / q / : 「ッ」で示されるツメ音を、抽象化した記号。
- / N / : 「ン」で示されるハネ音を、抽象化した記号。
- / c / : 「ッ」などを、/cu/ のように表わす。

第1章 ことばの進化論



ダーウィニズムと言語学

チャールズ・R・ダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) といえば、あの一世を風靡した進化論の主唱者としてあまりにも名高い、イギリスの生物学者である。

なにしろ、人類というものは他のいかなる生物とも区別されるべく神によって創造されたものである、ということが「常識」としてまかり通っていた時代のことである。そこへいきなり、サルが徐々にパンツをはくようになってとうとう人間様になってしまった、とやったのだから、当時の人たちのあわてふためきようは、尋常一様ではなかったに違いない。

というわけで、彼の不世出の名著『種の起源』——正しくは『自然選択による種の起源について』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*, 1859) ——が他の分野に与えた影響は、とびきり甚大なものであった。

たとえば、社会科学の分野では「社会ダーウィン主義」と呼ばれる進化論的思潮が芽生え、生存競争と自然淘汰のメカニズムが、利潤追求を旨とする資本主義経済における自由競争の解釈に適用されたり、人種間の支配闘争——とりわけ、先進資本主義諸国による植民地支配や帝国主義的侵略——を合理化するための、理論的な拠り所とされた。自然科学における合理性が世界観を変え、思想界に大きな波紋を投げかけた記念すべき出来事の一つとすることができよう。ここから、

19世紀末のヨーロッパは20世紀へと、まっしぐらに「科学文明の時代」をひた走ることになる。

では、なぜこのようにして、ダーウィニズムが熱狂的に受け入れられることとなったのかといえ、結果として、しかるべき仕掛けが長い年月をかけて、周到に用意されていたからにはほかならない。

時あたかも産業革命から100年を経過し、産業資本主義の発展期にさしかかっていたイギリスでは、海外市場の獲得や植民地争奪戦という自由競争がたけなわの時代であった。競争・淘汰・進化発展といった進化論の図式が、まさしく、そのような社会環境の中にドブプリつかって成長を遂げた、富裕階級出身のダーウィンなればこそその着想であったことは、いうまでもなからう。換言すれば、ダーウィニズムこそは、先進資本主義国家であった当時のイギリス社会そのものの縮図だったということなのである。

かくて、言語学もまたご多分にもれず、この生物学的進化論にきわめて大きな影響を受けることとなる。その一つの端的なあらわれが、シュライヒャー(August Schleicher, 1821—1868)によって唱えられた言語の新分類法「系統樹説」であり、そこからアンチ・テーゼとしてシュミット(Johannes Schmidt, 1843—1901)の「波紋説」が誕生を見る。また、すでに1786年以来、ジョウンス(Sir Arther William Jones, 1746—1794)によって指摘され成立していた比較言語学に、音韻変化の重要性や「祖語」と呼ばれる概念の提示など、方法論上重要な発展